

特定非営利活動法人

レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

2020年
3月1日
No. 119
隔月1回発行

ひきこもり



イラスト 小松 英行



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ サテライト・カフェ in 小樽～北欧スウェーデンからの取材
「未来の居場所づくり」田中理事長がシンポジウムで報告
- 3ページ 居場所「よりどころ」当事者を一人暮らしさせるべきか
- 4～5ページ NAGI ナギ～旭川当事者会 5周年記念報告 ほか
- 6ページ 稚内市主催の研修会～中高年のひきこもりの実態と支援
- 7ページ 新刊「ひきこもりピアサポートゼミナール」実施報告書
- 8ページ こちら事務局／編集後記

サテライト・カフェin小樽①
北欧スウェーデンからの取材

2月19日水曜日、「ひきこもりサテライト・カフェin小樽①」を開催し、今回は家族ピアスタッフのKHJ北海道「はまなす」の北郷恵美子会長に話題提供をいただきました（写真-1）。たくさんの質問が出され時間を15分超過し終えました。また本日は事前に英文にてやり取りをしていたアジアを拠点に調査活動をしている北欧のスウェーデンのジャーナリストの方々が参加し、終了後個別インタビューを受けました。スウェーデンの雑誌に掲載すること、前回は「日本の空き家」について報道したと述べていました。いろいろな意味で関心が向けられているようです。



(写真-1) スウェーデンのジャーナリスト2名（左）と北郷恵美子さん

KHJ主催「未来の居場所づくり」
田中理事長がシンポジウムで報告

2月21日金曜日、KHJ全国ひきこもり家族会連合会本部主催の「未来の居場所づくり」が東京都内にある「KE・Biz」として産業振興プラザ・多目的ホールで開催された。会場には約200名の参加者が詰めかけ、ひきこもっている本人や家族にとつての「居場所」がもつ役割、居場所づくりの運営で配慮すべき大切な点は何なのか。KHJが本年度調査した結果を読みときながら実践者、当事者と共に居場所のあり方を考えた。

第二部のシンポジウム（写真-2）では全国でひきこもり当事者会を運営する4名とピアスタッフ1名が集結し各団体の運営状況を話した。北海道を代表して出席した当NPOの田中敦理事長は、行政とパートナーシップをとり札幌市ひきこもり地域支援センターと協働して取り組む居場所「よりどころ」について報告し「北海道は土地面積が多く、世帯収入も本州とは異なり気軽に他の地域に行ける余裕がないため地方からひきこもりのことを発信することの重要性がある」と述べ、当NPOの活動が北海道のひきこもり支援にとつて重要であることを述べた。

シンポジウムの総括としてKHJは、居場所に求められているものは「利用者同士の交流」や安心できる「雰囲気づくり」などを挙げ団体ホームページで公表している。

SANGOの会

ピアスタッフが実施

1月30日（木）開催のSANGOの会は田中理事長がインフルエンザによる体調不良から欠席したため、急遽長く自助会へ参加され当NPO主催のサテライト事業でピアスタッフとして活躍されているとりさんに当日のリーダー役をお願いしました。新規2名を含む10名が参加し報告も受け無事終えました。



(写真-2) シンポジスト・（左から）Toshi氏（ひきこもり当事者・ひき桜運営スタッフ）ぼそっと池井多氏（VOSOT代表理事）、林恭子氏（一般社団法人ひきこもりUX会議代表理事）、田中敦（当NPO理事長）泉翔氏（NPO法人ウィークタイ代表理事）、シンポジウム座長・池上正樹氏（ジャーナリスト）

居場所「よりよいJFN」
当事者を一人暮らしさせるべきか

最近ネット上で話題となっている「子ども部屋おじさん」。いつまでも自室の主として君臨する中高年当事者を揶揄した表現だが、ひきこもりは部屋から出て一人暮らしさせた方がよいのだろうか。1月27日の「よりどころ」家族会では、全国ひきこもりKHHJ家族会連合会北海道はまなす会長の北郷恵美子さんと小樽市で二十年以上ひきこもり家族会を運営してきた鈴木祐子さんが話題提供した。

戦後樺太から引き上げてきた北郷さんは欲しいものが手に入らない家庭環境から早く脱したいとの思いで高校を卒業後社会人となった。それまで家事をやらなかつた北郷さんは一人暮らしをきっかけに自分で考えて行動するようになった。だからひきこもり当事者が一人暮らしすることは有益であると述べた。当事者を一人暮らしさせることと条件として親の経済力を挙げた。ひきこもり当事者は働いていないため、仕送りするにしても親世帯が窮乏していれば難しい。何よりも大切なことは本人が一人暮らししたいかどうかを確認することだ。北郷さんは「親元で暮らしているのは外に出て一人暮らしする自信がないから。そのような本人の気持ちを大事にしてほしい」と話した。

ひきこもり続ける次男との生活も26年を迎える。ひきこもりのきっかけとなった不登校

の頃、近所に次男について必要な情報だけは知らせていたため隣家の火事で自宅が延焼した際、一人で自宅にいた次男は近所の人に助けられ避難できたという。最近では除雪も手伝ってくれるようになり、近所の人が「ありがとう」と声かけしてくれることが本人の自信につながっていると北郷さんは感じている。普段から近所と仲良くする北郷さんの社会的な感覚がひきこもりの存在を隠そうとせずオープンにすることで地域のなかで生活するひきこもり当事者を孤立させないことにつながっている。ただしひきこもりに対して風当たりの強い現状もあるため「ある程度信頼できる方を見極め話してほしい」とアドバイスした。

わが子が不登校になり成人後もひきこもる生活が続いたが、自立を促すような支援には従わず、ひきこもっていても親子双方にメリットがある生活を送る鈴木祐子さんは、「子どもの頃から自立心がなく親と切り離されていたら野垂れ死にしていたかもしれない」と振り返り、だからわが子にも社会参加を強要するようなことを一切しなかった。

鈴木さんがひきこもり支援が充実している函館に移住を考え試行的に10か月間移り住んだ時期があった。実家に残された夫とひきこもる息子さんはそれまでやったこともない家事全般を協力してくれた。週1回二人で買物に行ったときは息子さんが安い食材を選ぶなど父親よりも経済感覚がある姿をみせたという。そういった子どもの知らない面も発見で

き「別居して良い経験ができた」と感想を述べた。また鈴木さんが体調の不良から入院したとき、息子さんが付き添い自宅に戻った後も時々様子を覗いて来てくれるなど心配してくれているかのような行動をみせてくれたことに「普段話はあまりしませんが安心できる側面もある」と述べた。

「先々の不安はあるかもしれないが今の生活を変えることはしない」北郷さんと鈴木さんの話からひきこもりを経験したからこそ導かれた結論が「無理に社会に追いやらす当事者にとってQOL（生活の質）を優先させた生き方」といえるのかもしれない。



ご寄付ありがとうございます

- 野村 俊幸 様 3万円
- 工藤 清 様 2万円
- 鈴木 祐子 様
手作りメッセージカード100枚
- 金井 ユミ 様 レターセット

当事者活動を円滑にすすめていくために活用していきます。



『「ひきこもり」の人たちの集まる場所があるということ』を終えて、ご報告



毎月第3水曜日のいつもの時間、いつもの会場で。でも5周年目をむかえた2月19日の日は、NAGI単独初ライブ、公開NAGI当事者会を開催。5周年記念を前に、日にちや会場、企画の中身を当事者会中に話を出し合い、関係する会や知り合い、図書館、住民センターなどにもチラシやポスターをお願いし、当日をむかえた。

・・・第1部 NAGI当事者座談会+参加者との交流

第1部。「当日前に出て話してもいい人は、話してね」と前月のNAGI内で伝えてあり、当日、さて何人の人が前に出てきてくれるだろうか？

フタを開けてみると、世話人の内島さんと、司会・進行役の武田さんと、私(植西)を含め6人の当事者たちが前に出てきてくれて、いつものようにハーブティー(当日はひきこもりブレンド)を飲みながら話をはじめた。

「設立から参加して、惰性でも毎月続けて参加してきた」という5年皆勤賞の前川くん、自分だったらこういう居場所がいいということ司会・進行役として実現してきた武田さんの5年間のNAGIの歩みの話、ハローワークやサポステで説教されたり上から

目線の支援をされてきた滝本くんの「もっと早くNAGIを知っていたら、心が安心できる場になっていたのに」という話、

「自分は去年の夏から来るようになって、今日で5回目くらいなんですけど、ふらっと来てみようかなと思って来てもいいよという場所があることが、自分にはありがたい」という橋本くんの話、「NAGIのことはずっと知っていたけど、精神障がい者の当事者として活動してこれでも、自分がひきこもりだっとなかなか認められなくて、ようやく去年の秋NAGIに来てみて、みんな話を受けとめてくれて居心地がいいなあって思ってます」というみちよちゃんの話、「初めて働いた職場で対人恐怖症になって、でもなんとか働けなくちゃと思って、苦手を克服するために、街頭のチラシ配りのバイトをやって、余計悪化して、でも自分はなんとかしなきゃと思って、派遣したりいろいろしてきていて、でもまた人間関係でうまくいかなくなって...」と前月に初めてNAGIに来てくれて、今日NAGIにまた来たいと言って前に出て話をしてくれたまーちゃん。座談会ライブは、当事者それぞれみんなが、NAGIという当事者会があることの意義を、生身の言葉で語ってくれた。

後半は、「じゃあいつものNAGIの感じをみてもらおうか」ということで、武田さんの進行で「この1ヶ月、どうでしたか?」と、いつものNAGIが公開オンエアされた。

それから会場の参加者との交流の時間が設けられ、「知人の息子さんが長いことひきこもっていて、今日の話伝えてあげたいと思う」、「当麻で米農家をしているんですけど、手伝いに来ていただけた分お米を差し上げるので、田んぼに来てみませんか?」、「当事者研究の話をもっと知りたい、私もやってみたい!」、「高校の教諭をしています。ひきこもりの高校生だとしたら、どんな言葉をかけてほしいですか?」といった話が参加者からあげられて、それぞれNAGIのメンバーが受け応えた。



〈NAGI司会・進行役の武田さんへの滝本くんレポート↓〉

武田さんが「では、近況報告を.....じゃあ、前川さんから」と、本当にいつものNAGIのようにはじまって、みんなもいつも通りの感じに話しはじめて、おもしろかった!

ひとりひとり、1カ月の出来事を話して、いつものように「この1カ月は・・・特になにもなかったです」って話す人もいて。それぞれに対して武田さんが返す話が、ひきこもりの問題に関連づけさせて、むだがない話を、はじめてこういうことを聞く人にも非常にわかりやすく話していて、「武田さん、すごい!」って思った。

「いや～～、武田さん、かつこよかった!」



2020.2.27 北海道新聞 朝刊 旭川版

…第2部 ~会場を仕切り、2つの部屋に分かれて行われました。

NAGI ナギ当事者会

第1部で会場で聞いていた人たちも加わり、プラス初参加の方2人、そのうち1人は1年前に1年間、レター・ポスト・フレンドからのしがきを受けとっていた方！

〈NAGI 5年連続参加の前川くんレポート↓〉

第1部と道新の記者からの取材を終えて、「つかれた~」という状態で、意識をとぼしていたのでよくおぼえていません。(笑)初参加の女性は、自分の年齢を気にしていて当事者会になかなか参加できなかったこと、今日みたいなことに参加できるNAGIのメンバーに「すごいすごい」って言ってました。

その方は自分よりもよっぽどやっていけそうに見える、けど自分より十代上のあの年代は、世間の目をもっときびしいような気もする。

美深から休職して旭川の実家に帰ってきている男性は、理解者としてずっといてくれるお嫁さんがいなかったら、自分はどうなっていたかわからない、とっていました。

5年間NAGIに出続けていて、5年前と、家にいることにはそんなに変わらないけど……、月1回出ていることは、NAGIに行くまでに街に出て、帰りにまた街をぶらぶらして、気分転換にはなっているなあー、と思う。

どなたでも会 ~ゆる体操+お茶会

「ひきももって固まったからだ・こころは、やさしくゆるめることでしかどうにもならなかった」と自談(植西)を紹介、あつまった9人で肩から肩甲骨をならんでさすり、あおむけに畳の上に寝て全身脱力。最近の私の大ヒット

「いやだいやだ体操」をみんなでいやだいやだと言いながら足まわり、腰まわり、全身をゆるめて、からだ・こころがあたたまりすっきりし、お茶会。

NAGIの座談会はどうでしたかと尋ねると、「ひとりひとりの言葉がすごく伝わった」「ひとりひとり言葉にはできなくても、よく考えてることがわかった」。また、「たまたまひきこもりの当事者としてこういう場所に出会っているけど、とてもうらやましい、私にも心のことを安心してしゃべれる場所がほしい!」って思った」と、ひきこもり当事者の別なくいまの社会においてNAGIのような居場所の大切さを、みんなであなづきながらききあった。

(文、植西あすみ)



ひきこもりピア・サポートについて

● ● ● ピア・サポート活動の概要 ● ● ●

ピア・サポート(peer support)とは、似たようなひきこもり体験を有する仲間同士が相互に支え合う活動です。今日扱われるピア・サポート活動の概要は、互いさまで互いの悩みをお互い悩みのない親類のものと交流を切りながら支え合えるところにあるとされています。

● ● ● 非構造化された場での展開 ● ● ●

互はピア・サポーターですと支援者のように明確に区別せず、専門知識や相談スキルを多く、行うような場ではなかったり、互は互い、自分と向き合う力や当事者に経験をもちあわせて、ある意味お互いさまで寄り合える非構造化された場での経験が求められる場での展開がとられていくものです。

● ● ● 限りなく対等に近づく関係性 ● ● ●

その意味で、ピア・サポートそのものの経験は限りなく対等に近づくことを目指します。その上下関係が生じやすい支援者とは異なり、ひきこもり経験のある仲間がそれぞれの経験を語りあうことで互い支え合える関係性が生まれ、くみあわれます。

経験者並びに家族ピア・サポーターとの協働

こうしたピア・サポートの活動場は多岐にわたりますが、当NPOでは従来の経験者ピア・サポーターと当事者、家族ピア・サポーターと当事者といった水戸市市民協会の活動から、経験者ピア・サポーターと当事者ピア・サポーターが連携し、互いに経験者ピア・サポーターが家族と対話の場をもつことで家族理解を促すこと、当事者の理解を促すことに努めています。

● ● ● 期待される専門職の理解 ● ● ●

今後ピア・サポーターが地域に広がっていくためには、専門職が互いに専門職の理解が欠かせません。ピアが寄り添う力を仲間たちと身につけていきます。

会員へのお誘い

当NPOの会員になりやすく最新情報を発信した会報「ひきこもり」や各種事業案内を優先してお届けします。

会費・寄付金一覧

正会員	入会金(初年度のみ)	1,000円
半年会員	(中途加入含む)	3,000円
賛助会員	入会金(初年度のみ)	1,000円
半年賛助会員	(中途加入含む)	2,000円
新入会	個人(1人)	1,000円
団体	団体(1口)	10,000円

相談利用一覧

電話相談(無料) / 090-3890-7048 10:00-19:00
 手紙相談(無料) / 定額84円切手の用紙必要
 電子メール相談(無料) / info@letter-post.com
 来室相談(有料) / 予約制1回 90分 2,000円
 出張相談(有料) / 予約制1回 90分 2,500円+交通費
 総量によるピア・アウトリーチ / 年額3,000円
 支援団体へのコンサルト / 1回3,000円

入会金及び年会費、寄付金等は、下記の指定する振込口座に振り込みをお願いします。
 ● 口座振替番号 / 02700-046261
 ● 振込名 leter-post フレンド相談ネットワーク

問い合わせ先(事務局)

NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク
 〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3番2号
 理事長 田中 毅
 TEL 090-3890-7048 email info@letter-post.com
 URL <http://letter-post.com/>

特定非営利活動法人
**レター・ポスト・フレンド
相談ネットワーク**

ひきこもりピア・サポート
活動のしおり

活動のしおりがリニューアル

当NPOの活動内容が記載されている活動のしおりが全面的にリニューアルされました。当NPO開設20周年を機にピア・サポーターの有用性や意味が説明され、ひきこもり当事者にとって参加しやすい居場所運営を行政と協働して実践してきた内容が記載されています。

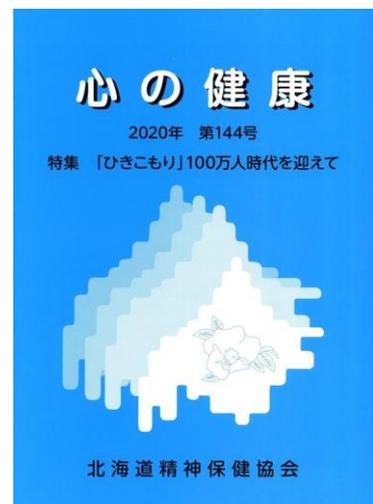
しおりは北海道赤い羽根共同募金公募助成金により作成し、A4版三つ折り両面カラー版で1,000部印刷、支援団体機関などに配布していきます。

「心の健康」に田中理事長が寄稿

北海道精神保健協会「心の健康」第144号2020.2刊行、特集：「ひきこもり」100万人時代を迎えてに「当事者団体活動から捉えるひきこもり支援—当事者が主体的に参画するNPO活動を通して—」というタイトルで田中理事長が原稿を寄稿しました。関心のある方はご覧ください。

北海道新聞「私の新聞評」田中理事長が担当

北海道新聞全道版に掲載されている「私の新聞評」の論者の一人として田中理事長が2020年度から1年間担当することになりました。新聞報道の資質向上を目的に各界で活躍する方の誌面批評が掲載されます。



稚内市主催の研修会 8050 問題 中高年のひきこもりの実態と支援

稚内市生活福祉部地域共生社会対策監兼社会福祉課長らが2020年度から開始する「ひきこもりに関する実態調査」にさきがけて開催された研修会で当NPOの田中敦理事長が講演を行った(写真-1)。会場には支援者を中心に147人の来場者を迎えひきこもり8050問題について学んだ。

講演のなかで田中理事長は厚生労働省が2010年に公表した「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」に基づきひきこもりの定義を解説し、ひきこもりの一般的なイメージは薄暗い部屋の片隅で膝を抱えて悩んでいるが、コンビニなど人目につかない程度の外出は可能であること、他者とコミュニケーションがとれないことの悩み以上に自身との関係性で悩んでいる人が多いと指摘。「徹底した自己排除による苦しさ」という自分が自分を受け入れられず、このようなさまざまな自分を世間に晒すことができない当事者心理の奥深さについて述べた。自助会活動では表面的には働いていても気持ちは閉ざしているという参加者もみられ、ひきこもりが複雑化していることにも触れ「支援のプロセスに必要なのはありのままの自分でよいということを感じ取れることが重要」と述べ「多様なひきこもりに対して一人一人に合ったきめ細かな支援が必要だ」と理解を求めた。

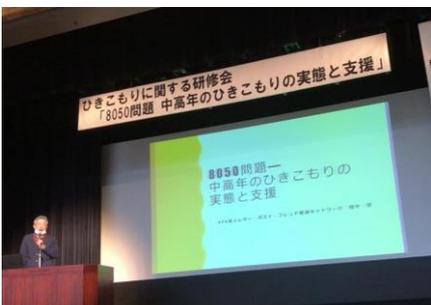
昨今クローズアップされている「ひきこもり8050問題」。1980年代までのひきこもりは十代の学齢期に多く顕出されていたが、最近では40～50代の当事者と高齢の70～80代の親世代が同居し続ける8050世代が

急速に増えている。2018年に内閣府が実施したひきこもりについての実態調査によれば40歳以上の当事者が61万人に及び、若年層と合わせると115万人以上の人がひきこもっていることが公表された。国政調査からも自活できない子どもが高齢の親と同居する割合が増えている傾向がある。田中理事長は、80代以上の高齢の親は体調不良などでひきこもり家族会にも顔を出すことが困難となっていくこと、また、ひきこもりは学齢期だけではなく30代で一定期間就労経験した人が離職してひきこもりになるケースもあり、労働問題が原因で高い年齢のひきこもりが増加している現状についても言及した。

介護離職で在宅状態となる人や非正規で働き続けるため経済的な理由から親と同居する人、家族の支えなしに生活できない障がい者も「8050問題」に入るため広範囲な事情を抱える人たちの課題であることを強調した上で「ひきこもり8050問題」の50代前後の当事者は低い自己肯定感に苛まれているため新しいライフステージに進めないまま現状に変化がえられず、親の年金で当事者の生活を維持している割合が多いことも当NPOが実施した調査で明らかになっている。札幌ではこの数年立て続けにひきこもり当事者親子が衰弱死した例もあり、当事者にとって親亡き後の生活は大きな課題であると指摘した。ひきこもっていることを周囲に言えず助けを求められずに孤立する家族が増えることを是正するため当NPOが昨年家族に対するアセスメントを行い未然に危機状態から予防す

る事業に取り組んだ結果から田中理事長は、「危機状態が露見する前の初期の段階で本人や家族を支えていく視点が福祉として必要」と述べ、ひきこもり支援では特に家族を支えることが重要と強調し「本人に会えなくても家族を支えるだけでも本人を支えることができる」と述べ、ひきこもりで悩んでいる家族に対して複数の支援窓口とつながりを持ち、一つの支援先がだめになっても違う支援を受けられるようつながり先を増やし必要な情報サービスを得ることを提唱。講演の最後に「相談を続けていけば必ず改善する」といった安心感をもたらすような関係を築き地域のなかで家族が孤立することのないように努めるよう要望した。

講演終了後「ひきこもりとどのように関わればよいか」など多数の質問が寄せられた。「ひきこもりという切り口ではなく何気ない世間話から核心に触れる手法で関わるのがとても大事」と田中理事長は回答した。



(写真-1) 講演する田中理事長

稚内市は国の調査に基づく試算で中高年のひきこもりが約80人いると表明。2020年3月より民生委員が各担当地域でひきこもり家庭の年齢や困っていることなど個人名を伏せて調査票にまと

当事者主体によるピアサポート学習会「ひきこもりピアサポートゼミナール」実施報告書

（増補版）が2020年2月に完成し発行された。本書は以前会報誌でも紹介した概要版をさらに充実させた内容となっている。近年当事者発の活動が活発化し支援という枠組みを超えた芸術文化活動などさまざま取り組みが見られるようになった。そうしたなかで著者は活動開始当初から一貫して一つのことに取り組み続けており、その信念こそがピアサポートの根底にあることを気付かせてくれるものとなっている。

本書でも触れられているが、ピアサポートの実践領域は広がりを見せ、従来の障がい領域だけではなくひきこもり領域での実践が専門書でも紹介されるようになってきている。しかし障がい領域では事業所などでの雇用や賃金を得る新たな資格制度体系が拡大しつつあり、ピアサポートとの語弊を招かない措置としてピアスタッフという用語が使われるようになってきている。そうした動向を踏まえたうえで、改めてピアスタッフもピアサポートとしての源流を見つめ直し振り返るために本書の積極的な活用が期待されると思われる。

本書は全13章90頁以上にも及ぶ構成となっている。したがって会報誌においてこれらすべてを網羅することは紙幅の関係上限界があると言わざるを得ない。そこで本会報誌ではこれからひきこもりピアサポートをやりたいと思う人たちに参考となりうる場所に焦点をあてて紹介することにかえたいと思う。

本書第7章「ピアサポートの全体像を掴む」ではピアサポートの12原則が掲載されていて、このうち6原則については「つぶやき」という興味深い当事者ならではの視点が指摘されており学ぶところが多い。

原則 1.ピアサポートは自発的な活動であること

自分がやりたいと思う活動であり、ピアサポートを相手も望んでいる状態であること

原則 2.ピアサポートは希望を持っていること

ピアと共に過ごすことで自然にエ

ネルギーがたまり希望が湧いてくること

原則 3.ピアサポートは偏見がなく開かれていること

ひきこもり経験は多様であり、決めつけや偏った見方をしないこと

原則 4.ピアサポートは共感的であること・

原則 5.敬意と尊敬にもとづくこと

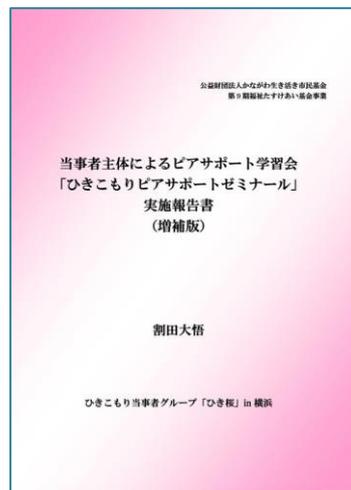
相手のことはよくわからないという自覚をもつことが敬意と尊敬でもあること

原則 6.ピアサポートは変化を促す活動であること

その人にとって当たり前前の状況になることで、自然にエネルギーが出て変化すること

ピアサポートとはサポートという言葉があるがゆえに、専門職の補助員としてとらえられることや、他者に役に立ちたい思いから自己の欲求を満たすものとは一線を画するものであろう。ピアサポートを学ぶことは自分自身を考えることであり、その姿勢態度を問いつけることであると思われる。なお本書はオンラインでも購入可能であり、ぜひ一読をすすめたい。

URL <https://hikizakura.thebase.in/>



皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com



◆新型コロナウイルスによる居場所「よりどころ」「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」開催中止について

札幌市は新型コロナウイルス感染が拡大していることを受け、2月24日、3月9日の居場所「よりどころ」親の会、3月2日の当事者会の開催を中止することを決定しました。3月16日開催の当事者会、3月23日開催の親の会開催実施については未定です。ご参加にあたっては事前に札幌市子ども未来局子どもの権利推進課、または当NPOまでお問い合わせください。同じく小樽市も3月18日開催の「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽^⑫」は新型コロナウイルス感染者拡大防止のため会場である小樽市総合福祉センターが使用できなくなったことから「中止」とさせていただきます。最後の開催を心待ちにされていた方もおられたと思いますが、諸事情によりご理解の上、よろしくお願い致します。

◆「SANGOの会」例会のご案内

2020年3月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話でお問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《初心者の例会》

とき：3月26日(木) 午後5時30分から7時30分まで ※状況により短縮開催となります

会場：札幌市社会福祉総合センター4階 札幌市ボランティア活動センター ボランティア活動室
(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩3分)

随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。http://letter-post.com/

◆居場所「よりどころ」開催のご案内

(当事者会) 3月16日(月) 6階 和室研修室「樹」
(親の会) 3月23日(月)※ 10階 1010会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分から4時まで

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。

※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止になる場合があります(上記参照)

◆一日福祉セミナー「ひきこもりについて考える～当事者のもつ力の可能性」開催のご案内

講師：田中 敦(当NPO理事長)

とき：4月15日(水) 13:30~15:30

会場：札幌市社会福祉総合センター4階

場所：札幌市中央区大通西19丁目 (地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)

参加費：500円 定員：30名

申し込み方法：電話、FAX又はEメールで申し込みください。

申し込み/問い合わせ先：社会福祉法人札幌市社会福祉協議会ボランティア活動センター
(TEL) 011-623-4000 (FAX) 011-623-0004

☆ 編集後記 ☆

年度末に入り新型コロナウイルス感染者が北海道内でも広がりを見せています。様々な人たちを介して免疫力が弱い人たちに感染していくため、日々の体調管理に気をつけ乗り切りたいと思います。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください